



油井 亀美也 宇宙飛行士

(平成 28 年 3 月 13 日に矢巾キャンパスで行われた油井亀美也宇宙飛行士ミッション報告会にて。詳細は 4 月号に掲載予定です)

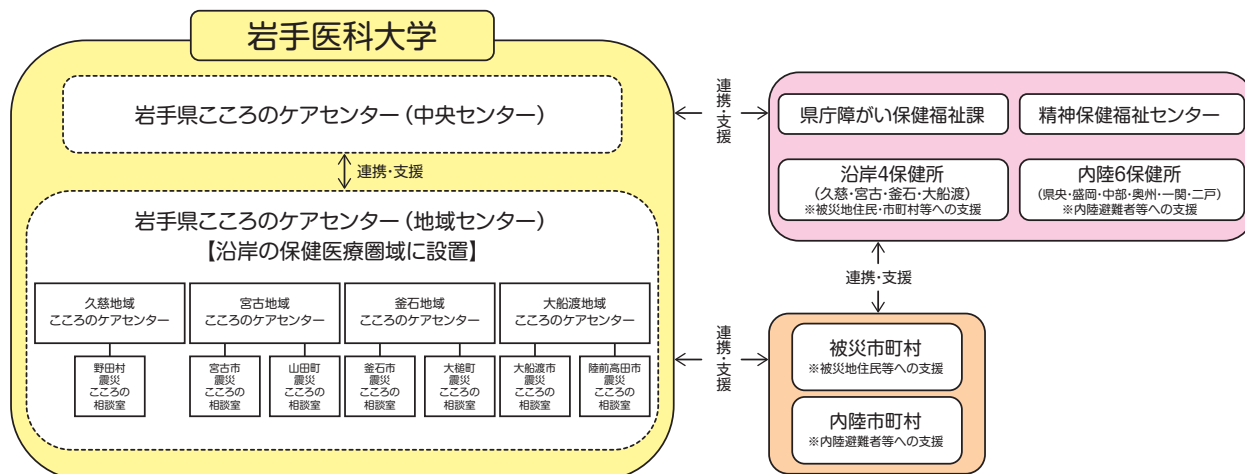
- 特集——— 岩手県こころのケアセンターの取組み
- トピックス——— 高校生がんセミナーが行われました
跡地活用検討会議が行われました
- フリーページ——— すこやかスポット医学講座 No. 64
「先天性心疾患の出生前心臓超音波スクリーニング」

岩手県こころのケアセンターの取組み

東日本大震災津波から5年が経過しました。岩手医科大学は岩手県から委託を受け、平成24年2月に沿岸住民の中長期的なこころのケア活動を行う拠点として、岩手県こころのケアセンター（センター長 酒井 明夫 神経精神科学講座 教授・附属病院長）を設置しました。

本号では、災害・地域精神医学講座 特命教授で、こころのケアセンター副センター長である大塚耕太郎医師と同センタースタッフの久慈地域での活動に密着し、日々の活動内容の一部をお届けします。

■ 岩手県こころのケアセンターの組織体制について



平成28年2月17日(水)

6:30 盛岡を出発

同センターが所有する車で、大塚医師とスタッフが交互に運転し、久慈市へ向かいました。

同センターでは、他にも宮古・釜石・大船渡の各地域センターでも週内に同様の活動を行っています。



9:00 久慈地域センターへ到着

久慈地域センターには8名が所属しています。

センター到着後、盛岡の中央センターのスタッフとTV会議システムを使ったミーティングを行いました。



9:30 野田村復興支援チーム定例連絡会

この日は、月に1度行われる定例連絡会がありました。県(久慈保健所・久慈地区被災者相談支援センター)・野田村(住民福祉課)・野田村社会福祉協議会・野田村地域包括センター・本学こころのケアセンターで構成され、活動内容の振り返り、支援状況や今後の支援計画の報告などが行われています。

連絡会では、「震災から丸5年を迎えようとしており、ニュース等でも取り上げられる機会が増える。心身に不調を訴える人も増えてくることが予想される。」といった情報があり、ケアの重要性を確認しました。



10:30 野田村こころの健康相談センター

久慈地域の野田村こころの健康相談センターは、野田村役場に隣接する野田村総合センター内に設けられています。

毎週水曜日、10:30～12:00、13:30～15:30の間、センターのスタッフが相談にあたります。

センター内は圧迫感の無いオープンスペースとなっており、6テーブルの窓口にそれぞれ1～2名ほどのスタッフや医師が健康相談にあたり、被災者の生活の苦労や健康問題などに耳を傾けています。

相談者には、ドリンク、そして、お菓子を用意しています。落ち着いたBGMも流れるその空間は、さながらカフェのような癒しの場であり、野田村のマスコットキャラクター「のんちゃん」にあやかり、のんちゃんカフェとも呼ばれています。また、相談中、看護師資格を有しているスタッフが、リラックス効果のあるセラピューティック・ケアを各テーブルを回り行います。

相談者は終始リラックスした様子で、スタッフの方々と「お久しぶりですね。」や「また、お話ししましょう。」といったお話を交わされていたのが印象的でした。



相談センター内の様子
ケアセンターのスタッフ、
高山保健師さんにお書きいただきました。



製作に携わった方々
(左から)
片座 和彦さん
片座 恵さん
高山保健師

～ ぬくもりのある木枠での紙芝居 ～

こころのケアセンターでは、紙芝居をこころの健康づくり事業で使用しています。この「次郎物語」は岩手県にご縁のある作家の浅田次郎氏が、自殺対策のために、特別に書き下ろした物語です。紙芝居の絵を、ケアセンターの高山保健師がコンテで描き、字はセンター職員ご家族の書家舟山 文さんが書いています。そして、細かいところも丁寧に作られ温かみのある木枠は、被災者である片座 和彦・恵さんご夫妻の手作り。まさに、被災地の皆さんで作った心のこもった紙芝居です。

16:45 ミーティング

相談業務終了後、野田村役場の一室において、ミーティングが行われます。

ミーティング終了後、スタッフから、これまでのセンターでの活動を振り返り「相談に来た方の安心した顔が続ける力となっている」「震災直後より元気になっている方もいるが、当時よりも大変な状況の方もいて、今後も続けていきたい」等の感想が寄せられました。大変だった活動を振り返り、思わず涙ぐむ方もいらっしゃいました。また、野田村役場保健師の方からは「こころのケアセンターは無くてもならない、太く頑丈な支援であり、これからも協力し合っていければ」といったお言葉をいただきました。



20:00 帰路

ミーティングが終わり、後片付けをした後、帰路につきました。

道中、大塚医師から「東日本大震災津波は、これまでに誰も体験したことのないような出来事であり、被災地ではこころのケアに関するノウハウも十分ではなかった。だからこそ、専門家が現場へ行き、地域の従事者の方々と一緒に取り組んでいく姿勢が大事である。被災者の良き伴走者であることが大切であると思う。被災者の悩みや不調も、時間の経過により変化している。長期的な視点でケアしていく必要がある」とのお話を伺いました。



その他の活動

他にも様々な活動を行っていますが、今回は久慈地域についてご紹介します。

被災地でのサロン活動への支援

久慈地域こころのケアセンターでは、地域でのサロン活動において健康相談や紙芝居などを用いた普及啓発、回想法を活用した語る場作りなどを支援しています。

岩手県の被災地では、こころの健康作り事業としてサロン活動が積極的に行われています。

住民の相互交流の場としても今後も重要な取り組みの1つです。



NPO法人サロンたぐりでの活動風景

久慈地域市町村等こころのケア 担当者連絡会

平成 18 年より久慈地域の市町村保健師、基幹病院や精神科病院のスタッフ、消防署員と一緒に岩手医科大学、岩手県こころのケアセンターが地域のこころの健康づくりや自殺対策、災害支援に関しての実態や活動を共有し、活動の方向性を一緒に考える場となっています。岩手医科大学及びこころのケアセンターでは久慈管内の取り組みに関しての助言を継続して行っています。



久慈地域メンタルヘルスサポート ネットワーク連絡会及び世話人会

久慈管内の精神保健や自殺対策に関わる実務者のネットワークとして、毎月開催されています。取材当日は、「久慈地域のこころの健康のため、一人ひとりがこれまで関わってきたこと、感じたこと」として1年間の活動の振り返りを行いました。グループワークでは「地域に悩んでいる人がいたら身近な方から直ぐに連絡をもらい、必要な支援を受けることができるネットワークが重要だ。」「連絡会に参加することでつながりの大切さを感じている。」「地域の色々な人達がこころの健康づくりに関わってくれていることを実感した。」「被災地の支援は大変で大切であり、頑張っている人へも支援が必要である。」「今後も継続した丁寧なかかわり大切だと感じている。」という声が聴かれました。その後、大塚医師のまとめの講演「久慈地域の自殺を防ぐため、私たちにできることを改めて考えよう」が行われ、自殺対策活動の効果や現状の課題、被災地支援の重要性などがお話に上がりました。



連絡会



世話人会

地域こころのケアセンター（久慈）

各地域ケアセンターでは、市町村や関係機関と連携し、被災者の健康相談等の個別対応業務や健康教育、研修などのこころの健康づくり事業への協力活動を行っています。行政職員等の職場のメンタルヘルス対策にも協力しており、写真のように職場管理者（野田村での野田村長や課長級職員向け研修会）に対する市町村のメンタルヘルス研修会で講師を務めたり、職員に対する健康相談に取り組んでいます。



取材を終えて

震災から5年を経過していても、被災地では社会的な困難を抱えている方は多く、まだまだこころのケアが必要であることを感じました。ケアセンタースタッフが被災者に寄り添い、一生懸命支援を続けている姿が強く印象に残りました。

（大学報編集委員会事務局）

周産期医療従事者を対象とした研修ALSO (Advanced Life Support in Obstetrics) が行われました

2月13日(土)と14日(日)の両日、矢巾キャンパス災害時地域医療支援教育センターにおいて、周産期医療従事者を対象とした臨床専門技術の習得を促進するための研修ALSO(Advanced Life Support in Obstetrics)が行われました。

この研修は、周産期救急医療に効果的に対処できる知識や能力の発展・維持を目的に行われたものです。

妊娠初期の合併症、難産、妊娠の内科的合併症などのレクチャーや、産後の大出血、分娩中の胎児監視などをマネキンを使用したワークショップが行われました。



高校生がんセミナーが行われました

2月20日(土)、矢巾キャンパス大堀記念講堂及び災害時地域医療支援教育センターにおいて、高校生がんセミナーが行われました。

このセミナーは、がんに対する正しい理解とがん患者に対する正しい認識、命の大切さに対する理解を深めることを目的に行われたもので、県内の高校生95名が参加しました。

午前に基礎講義が行われ、午後は、がんワークショップと体験セミナーが行われました。ワークショップでは、「家族ががんを患った際の苦悩とは?」さらに高校生である自分にはどのようなサ

ポートができるか?」というテーマでグループディスカッションが行われました。体験セミナーでは、「全身麻酔管理体験」「内視鏡手術シミュレーター体験」「エネルギーデバイス体験」「超音波検査・内視鏡検査体験コーナー」「抗がん剤調剤模擬体験コーナー」「病理診断実習」をグループで体験しました。

セミナー終了後には、本セミナーを担当した木村 祐輔 教授(緩和医療学科)から修了証書が授与されました。

参加した高校生からは「がんについて知ることがたくさんあった」といった感想が寄せられました。



超音波検査・内視鏡検査体験コーナー



修了式

第1回岩手医科大学跡地活用検討会議が行われました

2月24日（水）、創立60周年記念館10階会議室において、第1回岩手医科大学跡地活用検討会議が行われました。

この会議は、内丸地区が県都盛岡市における行政・医療・文教・報道・金融機能などが集積した地域に位置しており、本学移転後の跡地活用の前提となる基本的な方針を協議することを目的に、岩手県副知事、盛岡商工会議所会頭、盛岡市長、本学理事長が構成者となり設置されたものです。

始めに会議設立の趣旨と目的を確認した後、本学の総合移転整備計画や内丸地区と岩手医科大学の歴史、これまでの検討経緯などが報告されました。

意見交換では、谷藤盛岡市長から「内丸地区は、盛岡市の中心市街地として歴史もあり、非常に重要な場所である。少子高齢化などの社会情勢を見据え、長期的な視点で検討したい」、谷村盛岡商工会議所会頭からは「重要な課題として、中心市街地の活性化を挙げている。1号館の存続や、ILC実

現も視野に内丸地区の重要性も高まっているので、活発な提案を行いたい」、千葉岩手県副知事からは「県都盛岡は、岩手県における交流拠点であり、今後も都市としての魅力を高めることで、県全体としての波及効果も期待されることから、関係機関と連携して取り組みたい」、小川理事長からは「内丸地区は本学の発祥の地であるから、1号館は記念館として保存したい。また、附属病院移転により救急医療が無くなるのではないかとの声もあるが、今よりも高度な医療を提供できる体制を目指している。関係機関が一丸となり、多くの市民の意見を聞きながら検討を進めたい」との意見が交わされました。

今後は、平成30年度内に整備計画を決定することを目標に、本会議での検討の他、跡地活用検討懇話会や地域住民・学生・商店街との意見交換を行いながら、基本コンセプトの検討を行う予定です。



小川理事長



谷藤盛岡市長



谷村盛岡商工会議所会頭



千葉岩手県副知事

シリーズ 職場めぐり No.98

呼吸器外科学講座

当講座は2001年に呼吸器外科として発足し2008年呼吸器外科学講座になり現在にいたります。谷田達男教授以下5名の小さい教室ですので多くの部門のご協力の下に運営できており感謝いたします。

診療は肺癌、縦隔腫瘍、気胸など胸部疾患の手術が中心です。年間約300件、そのうち肺癌は約100件ですが年々増加しています。いずれの疾患も根治性や安全面を優先しつつ可能な限り患者さんの負担の小さい内視鏡手術を行う方針で臨んでいます。結果として創部が目立たず、痛みも少ない治療が提供できていると考えています。さらに内視鏡手術の適応を広げる、創部を小さくする、痛みを小さくする手法を取り入れるなど手技の向上を図っています。また肺癌治療は日々進歩しており、呼吸器内科、放射線科、病理診断科、看護部、薬剤部、リハビリテーション部等との連携で最適な治

療が行えるよう取り組んでいます。

今後は若い医局員も増える予定で、ますます患者さんに寄り添う治療の提供に取り組んでいく所存です。

(講師 出口 博之)



口腔顎顔面再建学講座 歯科放射線学分野

歯科放射線学分野は、教授、講師2名、助教3名、大学院生1名から構成されている少人数の分野です。

診療科としては、歯科関係で撮影された各種画像診断や口腔癌の放射線治療を中心としていますので、歯科外来及び医学部の中央放射線部や読影室を行き来しており、全教室員が医局にそろうことはめったにありません。臨床の他に学生教育に費やす時間も多く、3年生と4年生の矢巾講義、5年生の臨床実習、6年生の総合講義を行っております。ときどき学生さんが、レポートや時間内に終了できなかった課題提出するため医局へ来ますが、その時には学生さんに何か話しかけるよう心がけております。最近はデンタルやパノラマ診断のほかに、CT、MRI、US、核医学などが国試に出題されますので、以前より学ばなければならない項目が多く、学生さんの忙しさが分かるような気がします。

集合写真は、教室員の人数が少ないため、歯科外来

の放射線技師の方や秘書の方、大学院生の女子力で水増しました。少々華やかな分野に感じていただけますでしょうか。

(教授 小豆島 正典)



中央臨床検査部 (生理機能検査室)

職場めぐり中央臨床検査部編3番目は生理機能検査室です。事務員1名を含む15名のスタッフで①循環生理②神経生理③呼吸生理の3部門を担当しており、主に中病棟2階中央に位置する心電図検査室と脳波検査室、そして採血室の向かい側にある呼吸機能検査室で検査を行っています。また、検査室内で行う検査にとどまらず、外来での超音波検査・手術室でのモニタリングなど院内各所で様々な検査を行っており、検査技術のみならず他部署とのコミュニケーション能力を兼ね備えた技師の集団です。

検査室の理念である「開かれた検査室」は勿論のこと、臨床側と患者様を「繋ぐ検査室」を目標に、各診療科の先生方のご指導の下、正確で高度な検査技術と得られた結果を読み解くための多くの知識を習得して診療

に役立つ検査を提供できるよう、技師一同日々努力をしています。

(主任臨床検査技師 工藤 小百合)



地域医療連携センターは、これまで地域医療連携推進室として業務を進めて参りましたが、平成26年10月に新たな組織として、外来棟3階に設置されました。現在は医師3名、看護師4名、メディカルソーシャルワーカー1名、事務員6名で構成されております。

業務は、前方・後方連携、退院調整、FAX紹介受付、セカンドオピニオン受付、広報、関係機関との連携等、多岐に渡っており、平成27年11月には新たな取り組みとして、ベッドコントロールを開始致しました。

当センターでは、看護部、医務課、相談室を交えミーティングを毎週行っており、現状の問題点や新たな取り組みについて話し合いを重ね、地域連携をより推進するための方法を模索しております。

地域包括ケアシステムの構築が掲げられ、今まで以上に関係機関との連携が重要視される中、その中心的な役割を担う部署として、今後も様々な取り組みを計画

しております。関係各位におかれましては、ご理解とご協力のほど宜しくお願い申し上げます。

(事務員 川本 力)



平成28年度入学式

岩手医科大学・岩手看護短期大学

日時：平成28年4月8日（金）10時00分より
会場：岩手県民会館大ホール

岩手医科大学医療専門学校

日時：平成28年4月7日（木）10時00分より
会場：歯学部4階 講堂

理事会報告（1月定例－1月25日開催）

1. 役職者の選任について

副学長（総務・岩手県高度救命救急センター担当）
小林誠一郎（新任）
副学長（岩手県こころのケアセンター・岩手看護短期大学担当）
酒井 明夫（新任）
（平成28年4月1日から平成30年3月31日まで）
副学長（歯学部改革担当）三浦 廣行（再任）
（平成28年4月1日から平成29年3月31日まで）
医学部長 佐藤 洋一（新任）
（平成28年4月1日から平成31年3月31日まで）
歯学部長 三浦 廣行（再任）
（平成28年4月1日から平成29年3月31日まで）
薬学部長 名取 泰博（新任）
附属病院長 杉山 徹（新任）
（平成28年4月1日から平成30年3月31日まで）

2. 教員の人事について

形成外科学講座 教授 柏 克彦
（現 同講座 特任教授）
（発令年月日 平成28年4月1日付）

3. 看護学部教員の人事について

4. 職員の人事について

事務局長 吉田 達朗（現 財務部長）
（発令年月日 平成28年4月1日付）

5. 看護・政策研究部門の設置に伴う 組織規程別表2の一部改正について

6. 附属花巻温泉病院の運営について



内科学講座血液腫瘍内科分野 鈴木 雄造 助教が 第77回日本血液学会学術集会優秀ポスター賞を受賞しました

10月16日(金)から18日(日)、金沢市で開催された第77回日本血液学会学術集会において、内科学講座血液腫瘍内科分野 鈴木 雄造 助教が優秀ポスター賞を受賞しました。

日本血液学会は、血液学の発展に意義のある学術的研究を支援し、医学教育と血液診療の向上に必要な学術調査や人材育成を積極的に推し進めることを目的とした学会で、鈴木助教のポスター「血液悪性腫瘍の治療経過中に認められたoccult HCV infection 3例の稀な症例報告」は、この日本血液学会学術集会へ応募された数多くの演題の中で、特に優れていた価値ある内容のポスター発表10題のうちの1つに選ばれました。

(文責 内科学講座血液腫瘍内科分野 講師 小宅 達郎)



救急医学講座 小野寺 誠 講師が日本中毒学会東日本地方会において4年連続優秀演題賞を受賞しました

この度、2016年日本中毒学会東日本地方会(東京)におきまして、4年連続優秀演題賞を受賞する栄誉に預かりました。2013年の第27回(山形)では「コデングタケ中毒が疑われた2症例」を発表し、自宅付近で採取したキノコを摂取することの危険性を報告しました。第28回(東京)では「ラディオガルダーゼを使用した急性タリウム中毒の1例」と題し、殺鼠剤服毒症例に対して解毒剤であるラディオガルダーゼを本邦で初めて使用した経験を報告しました。第29回(埼玉)では「腸洗浄とPAMで救命した致死量を服毒した有機リン中毒の1例」と題し、一般的な治療薬としての硫酸アトロピンを使用せず、消化管除染を優先させることで有機リンの体内吸収を抑え救命しました。そして本年の第30回(東京)では「サツマイモとバナナの過剰摂取による高カリウム血症の1例」を発表しました。本症例はカリウム保持性利尿剤やARBを服用していたうえに、カリウム含有量が多い食品を過剰摂取し緊急血液透析で救命しました。4年連続の受賞にあたり、当センター薬物毒物検査部門の藤田友嗣先生をはじめ、多くの先生方やスタッフの皆様方へ感謝申し上げます。

(文責 小野寺誠)



救急医学講座 藤野 靖久 講師が第30回日本中毒学会東日本地方会で優秀演題賞、第20回日本門脈圧亢進症学会総会で会長賞を受賞しました

この度、第30回日本中毒学会東日本地方会(平成28年1月23日、東京)において、優秀演題賞を受賞しました。演題は「脂肪乳剤を投与したカンフル中毒の1例」です。局所麻酔薬の心毒性を軽減させることに端を発し、脂溶性薬物の解毒剤として脂肪乳剤がにわかに注目されていますが、中毒診療の現場ではまだ普及していません。今回、致死量をはるかに超えるカンフルの服毒にもかかわらず、脂肪乳剤の投与により良好な経過を得たことにより今後の臨床応用の可能性を示せたこと、さらには、高度救命救急センター薬物毒物検査部門の藤田友嗣助教の協力により、血中濃度の推移も報告できたことが評価されたと思われます。なお、第31回日本中毒学会東日本地方会は、平成29年1月29日、藤野靖久が会長を務め盛岡市で開催されます。医師のみでなく、薬剤師、臨床検査技師、看護師、臨床工学技士、警察関係、企業等、幅広い分野の人が集まります。興味のある方は是非ご参加ください。

また、過日、第20回日本門脈圧亢進症学会総会(平成25年9月19～20日、名古屋)において、演題「当院の食道胃静脈瘤に対する内視鏡治療の長期予後の比較」で会長賞を受賞しました。当院は、救急医学講座井上義博教授主導のもと、全国でも有数の静脈瘤治療症例数を持つ施設であり、その長期予後を示した研究が評価されました。この場を借りて報告いたします。

(文責 藤野 靖久)



編集委員コーナーNo.6 「お食事と喫茶の店 優遊(ゆうゆう)」

今回ご紹介するのは「お食事と喫茶の店 優遊」です。お店は本学附属病院から程近い内丸の東屋大手先店のお隣です。創業は昭和55年の老舗ですが、食欲旺盛な本学の学生達にも人気のお店です。学生A君オススメのメニューはカツ丼(並450円、中500円、大盛り550円)で、ワンコインの中盛りでもボリュームたっぷりで食べ応え満点です。その他、あっさり味のラーメン、牛丼(並450円)、日替わりのお弁当(650円)、ハンバーグ、ヒレカツ、お魚、オムレツの定食、スパゲティ+コーヒーのセット(750円)などメニューも豊富です。営業時間は11:00～15:00、17:00～20:00、土日と祝日がお休みです。落ち着いた雰囲気美味しいランチを楽しめるお店です。

(編集委員 佐藤 仁)



店内の様子



一番人気のかつ丼(中)

《岩手医科大学報編集委員》

小川 彰	菊池 初子
影山 雄太	江刺家和恵
松政 正俊	佐々木さき子
齋野 朝幸	米澤 裕司
小山 薫	佐々木忠司
藤本 康之	畠山 正充
佐藤 仁	大須賀志穂
成田 欣弥	武藤千恵子
山尾 寿子	野里三津子

編集後記

今年度の9月からスタートした編集委員コーナーは6回目を迎え、記事をみて実際にお店に行ってみた等の反響をいただいているようです。今後も皆さんに色々な情報を提供していきたいと考えております。取り上げてほしい情報をお持ちの方はお近くの編集委員までお知らせ下さい。来年度もよろしくお願い致します。

(編集委員 江刺家 和恵)

岩手医科大学報 第474号

発行年月日 平成28年3月31日
 発行者 学長 小川 彰
 編集 岩手医科大学報編集委員会
 事務局 企画部 企画調整課
 盛岡市内丸19-1
 TEL. 019-651-5111 (内線7023)
 FAX. 019-624-1231
 E-mail: kikaku@j.iwate-med.ac.jp

印刷 河北印刷株式会社
 盛岡市本町通2-8-7
 TEL. 019-623-4256
 E-mail: office@kahoku-ipm.jp

スポット医学講座

小児科学講座 助教 松本 敦



先天性心疾患の出生前心臓超音波スクリーニング

先天性心疾患congenital heart disease (CHD) の発生頻度は出生児の約1%であり、これは先天異常の中で最も高い。とりわけ動脈管依存性CHDは、胎児循環から新生児循環への移行時に動脈管の閉鎖によって急激に状態が悪化するので、すぐに動脈管開存作用があるprostaglandin E1を投与しないと致死になる。これには、①動脈管依存性肺循環（三尖弁閉鎖、純型肺動脈閉鎖、重症肺動脈弁狭窄等）と、②動脈管依存性体循環（左心低形成症候群、大動脈弓離断（図1）、大動脈縮窄）、および③動脈管依存性血液混合（完全大血管転位）がある。

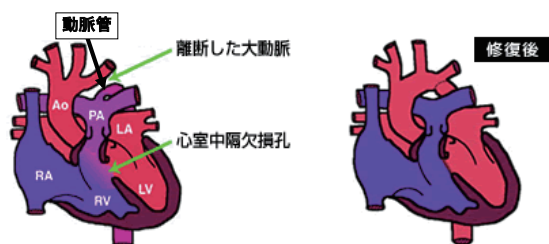


図1. 大動脈弓離断（左）と修復後（右）
RA, 右房; RV, 右室; PA, 肺動脈; LA, 左房; LV, 左室; Ao, 大動脈

動脈管依存性CHDは、これまで出生後に酸素飽和度モニターでスクリーニングし、状態悪化前に発見していたが、なかには見逃されるタイプのものである。従って、出生前診断に期待が寄せられてきたが、これには心臓の超音波診断に熟達した専門家が当たる必要があり、その普及が課題であった。

岩手県では超音波検査で診断可能な胎児異常のスクリーニング体制を整備することになり、その一環としてCHDの出生前心臓超音波スクリーニングの連携体制が整備された（図2）。具体的には、CHDが出生前に産科で疑われた場合、心臓超音波診断を行っている小児科医が精密診断に当たる。これには「小児救急遠隔支援システム」や「いわて医療情報連携・遠隔医療システム」を利用しており、本システムは超音波画像の描出技術向上

のための研修にも使用している。診断例については従来通り、院内分娩に小児科医が立ち会い、新生児集中治療室に入室した後、循環器医療センターで手術を施行している。出生前診断や治療は隣県からの依頼も少なくない。

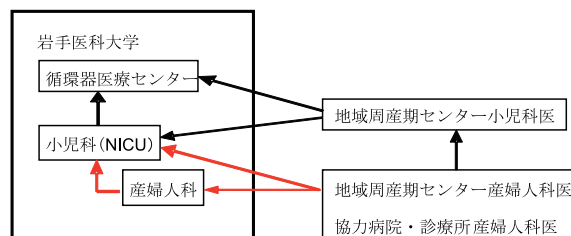


図2. 先天性心疾患の出生前と出生後疑い症例への連携体制
黒矢印は既存の連携で、赤矢印が整備された。

最近では、出生前心臓超音波検査数に占めるCHD診断数が増え、検査依頼の精度が向上している（図3）。また、循環器医療センターに入院した生後3カ月未満児の出生前診断率が増加している（図4）。

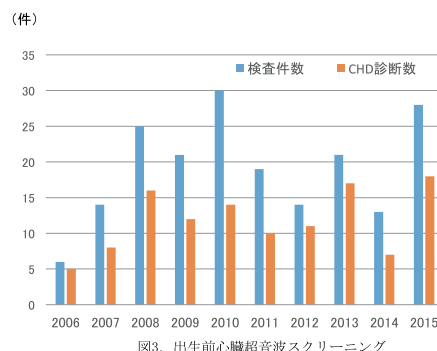


図3. 出生前心臓超音波スクリーニング

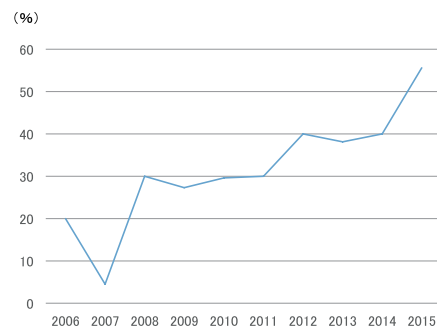


図4. 循環器医療センターに入院した生後3カ月未満児の出生前診断率